

## 書 評

宮田喜代藏著

## 『貨幣の生活理論』

中山伊知郎

凡そ理論的な研究の價值はその理論的な立場が如何に對象分析の中に生かされてゐるかの點から判断せられねばならぬ。方法論と内容とが必ずしも相覆はないことは體系的な理論的述作においても屢々見られるところの事實であり、方法論は最後にあるべきものだと云ふやうな見解もこの事實を逆に表現するものとして意味をもつのであらう。かやうな觀點から見るとき、吾々は先づ宮田博士のこの著が方法と内容との統一において恊に美しい成果を示してゐることを特記しなければならぬ。たとへその方法自體に同情をもたぬ讀者に對しても、方法を身に

つけた美しさは否定されない。たとへ個々の叙述内容に疑問がもたれる場合でも、分析の細部に至るまで一つの方法を貫かうとする著者の努力は、尊敬を以て看取せられるであらう。細字七百餘頁の叙述が讀者にとつて殆んど負擔とならないのはその當然の結果であり、吾々はここに本書の理論的研究としての成功を認めねばならない。

著者の方法的立場は云ふまでもなく生活經濟學である。生活經濟學的立場の特色は著者においても種々の側面から規定せられてゐるのであるが、主題たる貨幣理論の展開にとつて最も重要なものは本質の階層組織の論理であらう。例へば今問題の中心となつてゐる貨幣經濟の特質は先づその上位形態としての流通經濟の一特殊形態として把握せられ、その流通經濟は更にその上位形態としての共同經濟の下位形態として把握せられると云ふのがそれである。かかる階層的把握の下に上位形態と下位形態との内面的な關聯が明かにせられるためには、これらの階層を貫いてその上に仰ぎ得る最終の目的が與へられねばならない。その意味において階層的把握方法は當然に目的論的考察

を前提とする。この目的はこれを經濟の領域について云へば、「欲求と調達の持續的調和」に外ならず、各個の階層はこの目的の達成に關聯して、それぞれの地位を決定されるのである。そこでいま階層の論理をその目的論的考察の特質に即して考へて行くと、個々の階層における經濟秩序の形態は單に形態として把握せらるべきではなくて、むしろ經濟生活の根本問題を解決して經濟そのものの理念を實現するところの構成として理解されねばならぬ。再び貨幣經濟についてこれを見れば、それ貨幣と云ふ手段を通じて經濟生活の根本問題が解決せられると云ふところにその特質をもつ。このことはこれをゴットル流に表現すれば、貨幣たる手段の作用を通じて經濟への構成が實現されることに外ならない。形態論から構成論への展開はかくて生活經濟學における經濟基礎論からの必然的の歸結として理解せられるのである。尤も著者によればこの展開は從來の生活經濟學においては充分に果されておらず、それ故にまた著者の最も苦心したところであると云ふ。實際、著者が直接に目標とする貨幣經濟の理論とその延長としての貨幣の經濟理論との統一的把握は、全くこの構成論的考察の上に礎かれてゐるのであり、その意味においてそれは著者の經濟學の理論的實踐的性格を基礎づけるものと云ひ得るであらう。

注意を貨幣經濟の構成論考察の上に集中しよう。この考察の下における貨幣經濟の特質は右に述べたやうに、貨幣なる手段を通じて經濟生活の根本問題が解決されるところにある。従つてこの構成論は自ら二つの段階の考察を要求する。その一つは貨幣經濟をその上位層たる經濟の根本問題の解決に役立つ職能的意味に従つて最終目的論的に考察することであり、その二は貨幣經濟がかかる職能的役割を果すための本質的手段として貨幣が如何に作用してゐるかを考察することである。

先づ第一の貨幣經濟の職能的意味に關しては、最終的には國民經濟における共同經濟の生産と、同じく共同經濟的消費とが貨幣經濟の形態において結合せられてゐる點を擧げねばならない。貨幣經濟一般の上位層としては共同經濟としての國民經濟を擧げねばならないからである。しかしこの場合國民經濟への構成は云はゞ一擧に行はれるものではない。それに貨幣經濟が流通經濟の一下位形態たることに應じて先づ家政經濟及企業の各個體經濟の構成を必要とし、これらの構成が結合せられて國民經濟なる構成に至る關係にある。それ故にここで貨幣經濟の構成論的研究もまた自らこの階層に應じて二つに分れる。家政經濟及び企業の構成に對してもつ職能的意味と、更に國民經濟の構成に對してもつ職能的意味とがこれである。先づここで中

心となる國民經濟への構成的職能が果され得るためには、分裂した家政經濟と企業とが綜合せられることを必要とするのであるが、この場合綜合の役割を果すものは貨幣である。即ち、貨幣は消費財市場と生産財市場において、二つの社會構成體の間を循環することによつて流通經濟の意味を完了するものにならぬ。この場合、構成がもつところの綜合者としての意義は、生活經濟學の基礎たる階層的論理を一貫するものとして特別の注意が拂はねばならぬ。階層的論理はこれを問題の序列として見る場合には、常に上位階層が下位階層に對して特殊の問題を與へ、下位階層はこれを自己の問題としてもらひ上げることによつてその問題の解決につとめるものと解釋されるのであるが、かかる解釋が成立し得るためには一つの構成には常にこの問題の關係を見透し得るだけの統一がなければならぬからである。しかもこの關係は單に國民經濟と云ふ構成についてののみ見られるものではない。その下位構成としての家政經濟乃至企業についても常に同種の關係が見られ、かかる關係が分裂的な觀點においては屢々、孤立的に解釋される貨幣の職能を、よくそれぞれの地位において規定し得ることとなる。この關係の綜合的把握はかくて生活經濟學的貨幣經濟分析の中核をなすものとして評價せられるであらう。

ただ貨幣經濟の職能の意味を以上の如く解釋する場合には、その反面として貨幣がかかる意味を實現する手段としての職能が問はねばならない。これが貨幣經濟の構成的考察における第二の問題であり、この意味において貨幣經濟の理論は直ちに貨幣の經濟理論につながる。この場合の貨幣がもつ本質的職能は一應は既に貨幣經濟の構成的考察において與へられてゐると云へるであらう。即ち右の考察は、貨幣が一般的交換手段として一方では家政經濟乃至企業の構成を、他方では更に進んでこれらの下位構成體を包括する國民經濟の自動的構成を實現することを示すものであるが、この職能こそは貨幣の本質的職能として貨幣が貨幣經濟における必然的手段たることを示すものと云はねばならぬ。しかし貨幣がかくの如き本質的職能、即ち經濟的職能を果し得るためには、それは先づ一般的購買手段としての技術的職能によつて支へられてゐなければならぬ。家政經濟乃至企業と云ふ構成を組成する購買乃至販賣、國民經濟の構成を組成する家政・企業のそれぞれ一面的なる活動は、すべて購買手段としての貨幣によつて支へられてゐるからである。一般的購買手段としての貨幣の職能を一面的に強調することはもとより排斥せられねばならないのであるが、貨幣の本質的・經濟的職能が一般的購買手段としての技術的職能によつて

支へられ、これを媒介として實現される關係に立つて居ることはこれを看過してはならない。ここに貨幣の經濟的職能と技術的職能との間には、一般に統轄者と限定者との關係が成り立ち、それは又根本的には階層論理の具體的形態としての、經濟と技術との區別に立脚するものである。著者によれば從來の貨幣本質論の缺點は、この重要な關係が充分明確につかまれてゐないところから生ずる。即ちある場合には經濟的職能のみに重點がおかれてこれを制約すべき技術的職能が不當に輕視せられ、(双面主義)ある場合には現象的な技術的職能に目を奪はれて本來の經濟的職能が顧みられてゐない(一面主義)。本來の把握の仕方は當然に双面主義と一面主義との綜合によつて果されねばならぬのであるが、これを果すものこそ經濟と技術との區別を強調する階層論理に外ならないと云ふのである。

## 二

ここまで吾々は著者の叙述の基本的な筋道を追ふて來た。しかし效では轉じて貨幣論上の二二の基本問題に關して著者が到達した見解に集中しつゝ若干の私見を述べたい。

先づ第一の點は著者の貨幣本質觀である。既に述べた如く著者は貨幣の本質を以て、購買手段を媒介とする交換手段と規定

するのであるが、この規定がもつ表面的な二元性はいまや著者の方法によつて完全に克服せられてゐる。一般的購買手段によつて實現せられた貨幣事象と一般的交換手段によつて充實せられた經濟的事象との内面的關聯の中に貨幣經濟の特質を見ると云ふ立場からすれば、購買手段としての貨幣は純然たる技術的職能に關するものであり、交換手段としての貨幣こそ、眞の經濟的職能をつくすものであることは明白であると云はねばならぬ。従つてこの二つの手段の綜合が、實は一般的交換手段と云ふ經濟的職能の階層に立つことは容易に理解し得るところであり、その意味においてそれは貨幣を以て一般的交換手段とする通常の表現に眞に經濟理論的な根據を與へたものと云ふことが出来るであらう。しかもこれに到達するまでの道が常に購買手段としての貨幣を出發點として考察せられ、購買手段たる職能に制約せられることを顧慮しつゝ進められてゐることは、到達された一般化を單に抽象的一般化に止めしめない所以のものとして特記せられねばならぬ。この貨幣本質觀が進んで貨幣現象の具體問題に下り來る用意はここに與へられてゐると云ふべきであらう。

ただ若し以上の解釋が正しいものとすれば、吾々がかかる交換手段乃至購買手段がその職能を果すに當つて採るところの形

態に更に注目せねばならぬ。それは例へば手段と云ふ表現自体が直ちに何らかの「形」を豫想せしめると云ふことに緣由するものではない。これらの手段の手段性は常にその具體的な作用の形態の中に認められるものであり、著者が批判の對象とする一面主義と双面主義との對立も實はその把握の相違に立脚することと少くないからである。一層單純に云へばこの場合の貨幣は有形的手段であるか、それとも計算の單位であるか。著者はこの間に答へて貨幣が常にこの二者の統一に外ならぬとしてゐる。即ちこれを購買手段として見れば、それは賣買取引を實現する有形的な一般的購買手段たる作用と、あらゆる商品の價格を表示する「一般價格表示手段」たる作用を統一するものに外ならず、これを交換手段として見れば、それは一切の販賣と一切の購買とを双面的に結合する有形的手段たると共に、一切の生産財の價格と一切の消費財の價格とを共通に同一貨幣單位において表示する役割を果し、兩作用相まつて共同經濟的な生産と消費とを結合する職能をつくすものである。

吾々はかくの如き見方が再び著者の常に綜合的な立場を示すものとして理解することも出来よう。けれどもここに手段たる職能を擔ふ「有形的手段」と價格表示に役立つ「貨幣單位」とは果して同格において統一せらるべき二つのものであるか。著

者の叙述はむしろこれを否定してゐるやうに見える。即ち著者は後者を規定して常に「有形的手段によつて保持されてゐる貨幣單位の作用」と云つてゐるのであるが、若し然りとすれば貨幣單位の作用には必然的に有形的手段としての作用が先行し、従つてここに貨幣の手段職能を支へるものは始めから一つの有形的手段のみとなるであらう。二つの作用の綜合統一とは前提せられたる事實を歸結において表現するものにすぎず、吾々はここに貨幣單位の作用に對してのむしろ否定的な見解を見るのである。しかしかかる見方は果して著者の階層論理の求めるところであらうか。購買手段を媒介として交換手段職能が實現される場合、手段としての貨幣の作用の本質は果してその有形的手段性に求められるであらうか。吾々はむしろ技術的職能と經濟的職能とをつなぐものとして「貨幣單位」の作用を重視したのである。勿論この場合の貨幣單位は單に有形的手段によつて保持される作用ではなく、むしろある意味においてこれに先行するものでなければならぬであらう。しかしかかる意味の貨幣こそまさにその經濟的觀點において重要な地位をもつものではないか。少くとも吾々はここで著者の「貨幣單位」と云はるゝものへの更に立入つた考察を期待したい。或ひは著者の立場に従つて云ふならば、吾々は以上の二つの作用についても、

著者の所謂階層論的把握が更に徹底されることを希望するのである。

第二の問題は貨幣の價值である。貨幣價值の性質規定があらゆる貨幣理論の中核の問題をなすことは云ふまでもないのであるが、その貨幣價值は著者において如何に把握せられてゐるか。ここでもまた吾々は著者の見解がその貨幣本質觀に對應して全く論理的に展開せられてゐることを認めねばならぬ。即ち著者によれば、貨幣の本質がその購買手段としての技術的職能と交換手段としての經濟的職能とに即して規定せられたことに對應して、この手段に對する評價も亦購買手段に對する技術的評價と交換手段に對する經濟的評價に分たれねばならない。通説において貨幣の價值が貨幣によつて獲得される物財の利用の反映にすぎないとされるのは、右の中技術的評價に着目したる結果に外ならず、決して貨幣價值の全部を捕へたものではない。貨幣の本來の評價は貨幣の本質に對して行はれる評價でなければならず、この意味の評價は技術的評價をその中にふくむ本來の經濟的評價でなければならぬからである。換言すれば恰も貨幣の本質規定において技術的職能は只經濟的職能を支へる意味において問題とせられたと同様に、この場合の技術的評價は本來の經濟的評價の中に單に部分的評價として登場するにすぎない

のである。然らば本來の貨幣價值を決定すべき貨幣の經濟的評價は評價として如何なる特質をもつか。著者がこれについて舉げるところは全體的、双面的、持續的の三つである。即ち貨幣の評價は第一に、個々の貨幣所得に對して部分的に行はれるものではなく、一定期間の經濟生活を基礎づける貨幣所得總額について行はれるものであると云ふ意味において全體的であり、第二に、かかる貨幣所得總額が個々の經濟生活に對して積極的に貢獻するところとこれに對して消極的に犠牲になるところとを統一する意味において双面的であり、第三に、家政經濟内に登場する貨幣所得を經濟構成の全期間に亘つて評價すると云ふ意味において連續的である。ここに全體的、双面的、連續的な把握が根本的に階層の論理に發することは重ねて云ふまでもないであらう。

そこでこれを要約すれば貨幣の價值は手段としての貨幣がもつところの全體的・双面的・連續的價值となるのであるが、かかる價值は現實の經濟生活における貨幣の作用を如何に理解せしめるか。先づ第一の疑問はかかる價值が既に手段としての貨幣の評價を越ゆるものではないかと云ふ點にあつまる。詳言すれば、著者は主として家政經濟内における經濟主體の貨幣に對する手段評價を出發點としこの評價を階層的に積み重ねること

によつて右の歸結に到達すること上述の如くであるが、かくして到達された最後の段階に立つてこれを顧みればその價值は既に單なる手段評價を離れ、むしろかかる手段評價の一切をして抑も可能ならしめる所以の價值としてこれに先行するものと見られるのではないかと云ふ問題がこれである。この點を強調することは遡つて云へば前段貨幣本質の規定において「貨幣單位」の地位を強調したことに通ずるものであるが、吾々はここでも亦かくの如き歸結を承認することがむしろ經濟的評價に重點をおく貨幣價值觀の一つの歸結であるべきことを指摘したい。著者が一面において經濟的評價の重要性を力説しながら、他面においてこの歸結にふれられなかつたことは評價の出發點を常に家政經濟におくことに由來するものと推定されるのであるが、若し云ふところの經濟評價が廣く一般交換手段としての貨幣の本質に對應するものであるならば、この評價の成立の基礎を同じく國民經濟の總體に求めることはむしろ當然の要求であつたであらう。少くとも貨幣の價值を家政經濟における評價のみかゝはるものとして把握することは十分に理論の要求に應ずるものとは云ひ難い筈である。

第二の疑問は資本としての貨幣がかかる把握において如何なる地位を占めるかと云ふ點に關する。全體的・双面的把握の性

質から見れば資本としての貨幣の價值も一應はすべて含まれたるものと見るべきであらうが、不幸にしてその説明においてはこの點は尙ほ明瞭には現はれてゐない。むしろ全體的・双面的把握から歸結するところの貨幣の價值は一つの結果的價值と解される側面が強く、かかる價值が本質的に動態的なる資本としての貨幣と如何なる交渉をもつかは残されたる論點と見るべきものの如くである。吾々はここに必ずしもケインズの立場をとつて貨幣の本質を現在と將來との結合手段に見出す點を強調しようとするものではない。ケインズのな見方の一面性に對しては、むしろこれを超へこれを含む價值の規定を目指す宮田博士の立場をこそ理論的に一貫したるものと認めるものである。唯現實の貨幣のもつ一つの性格が資本としての動的側面に認められる限り、貨幣現象の全體的・双面的價值といへども、今一步現實に近づいてこれを問題とする必要があるであらう。吾々はこの疑問を再び著者の理論の展開に對する希望として提出したのである。

以上、二つの基本問題に關聯して吾々の述べたところは既に單なる書評の範圍を超へてあるかも知れない。しかし吾々はこの範圍を超へたる論述がいささかも本書の眞價を誤解せしめないであらうことを確信する。むしろかかる論述を敢てせしめ、

進んでは恐らく本書の固有領域には屬しない疑問をさへ提出せしめるものは、本書を通じて讀者に迫る學問的香氣である。著者の勞作によつて吾々は既に幾多の學恩をうけた。著者の透徹せる理論的分析と學問上の情熱とは一度その勞作に接するもの

に忘れ得ざる印象を與へるものであらう。本書はその同じ著者のあらゆる長所を發揮するものとして、優に我學界の一代代表作となし得るものである。

本號執筆者紹介

常盤敏太氏	東京商科大学教授
吾妻光俊氏	東京商科大学教授
木村元一氏	東京商科大学助手
田上穰治氏	東京商科大学助教授
中山伊知郎氏	東京商科大学教授
山田雄三氏	東京商科大学教授